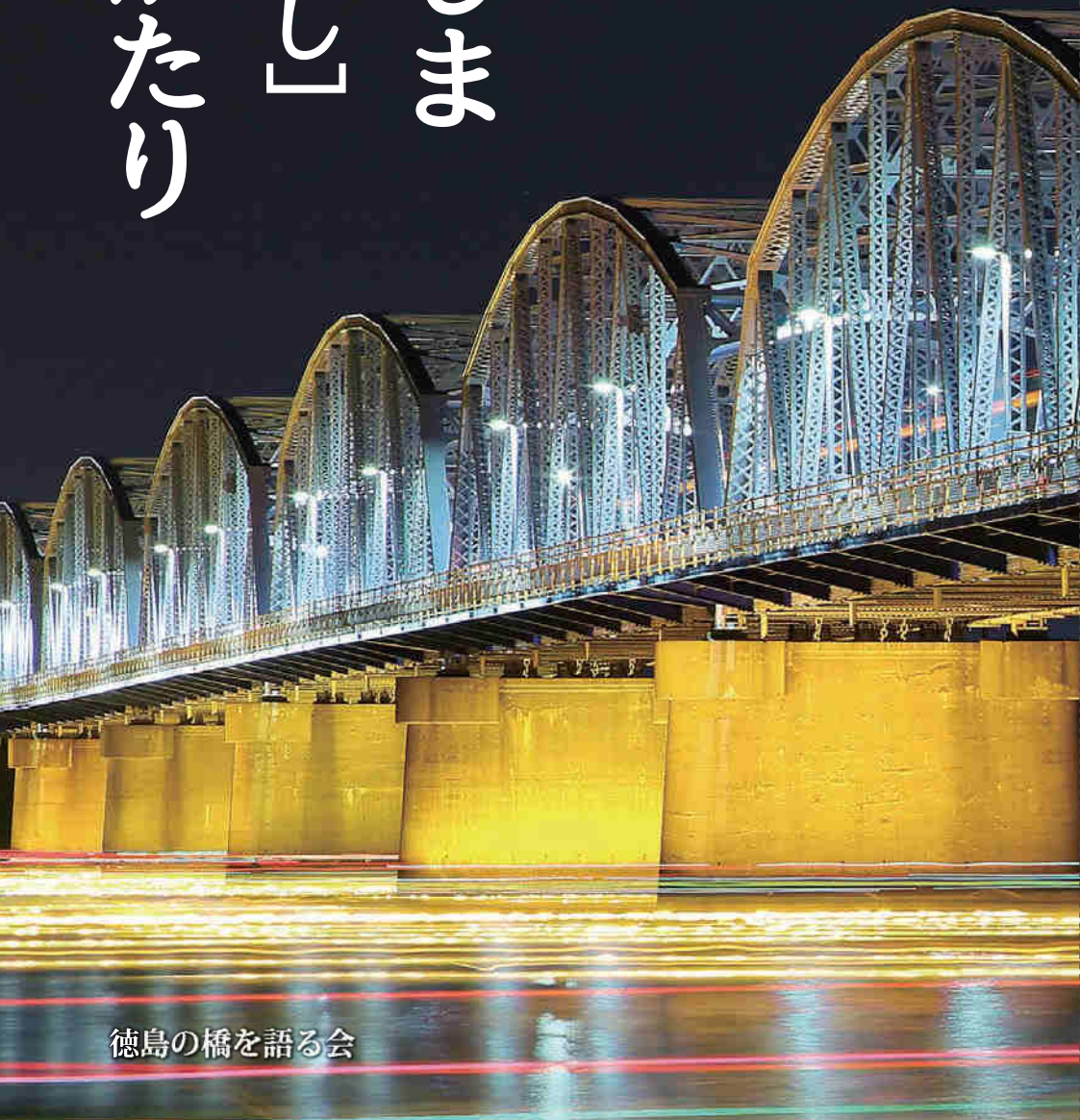


とくしま
橋「はし」
ものがたり



とくしま
橋「はし」
ものがたり

発刊によせて



古くより、人々は、大河吉野川の向こう岸に思いを巡らせ、渡し舟によって交流を育んで参りました。明治期には、それまで人しか乗れなかった渡し舟にも、岡田式渡船と呼ばれる大型の舟が発明される技術革新が起こり、輸送能力が大幅に向上し、馬車や自動車までもが渡河できるようになり、このことを契機に、吉野川では、地域間の交流がさらに拡大していきました。

一方、吉野川は、「四国三郎」の異名を持つ、日本三大暴れ川の一つであります。渡し舟は、洪水のたびに欠航し、痛ましい事故に見舞われることもあったことから、人々は常に、「吉野川に橋を架けたい」との強い願いを持ち続けていました。しかし、その流れは、洪水の都度変化し、川幅が安定しなかつたため、近代的な橋の建設には、先に堤防の整備が必要でありました。

明治以降、河川改修事業が進み、大正期に、本県が策定した「川大橋梁架設計画」によって、吉野川架橋は、いよいよ実現に向け動き出し、昭和初期、県民待望の「三好橋」、「穴吹橋」、そして「吉野川橋」が完成しました。その後も、人々の架橋への想いは衰えることなく、昭和の戦渦の中での架橋中断という困難を乗り越えながら、それぞれの地域の熱意によって、県内46もの吉野川への架橋が結実しています。

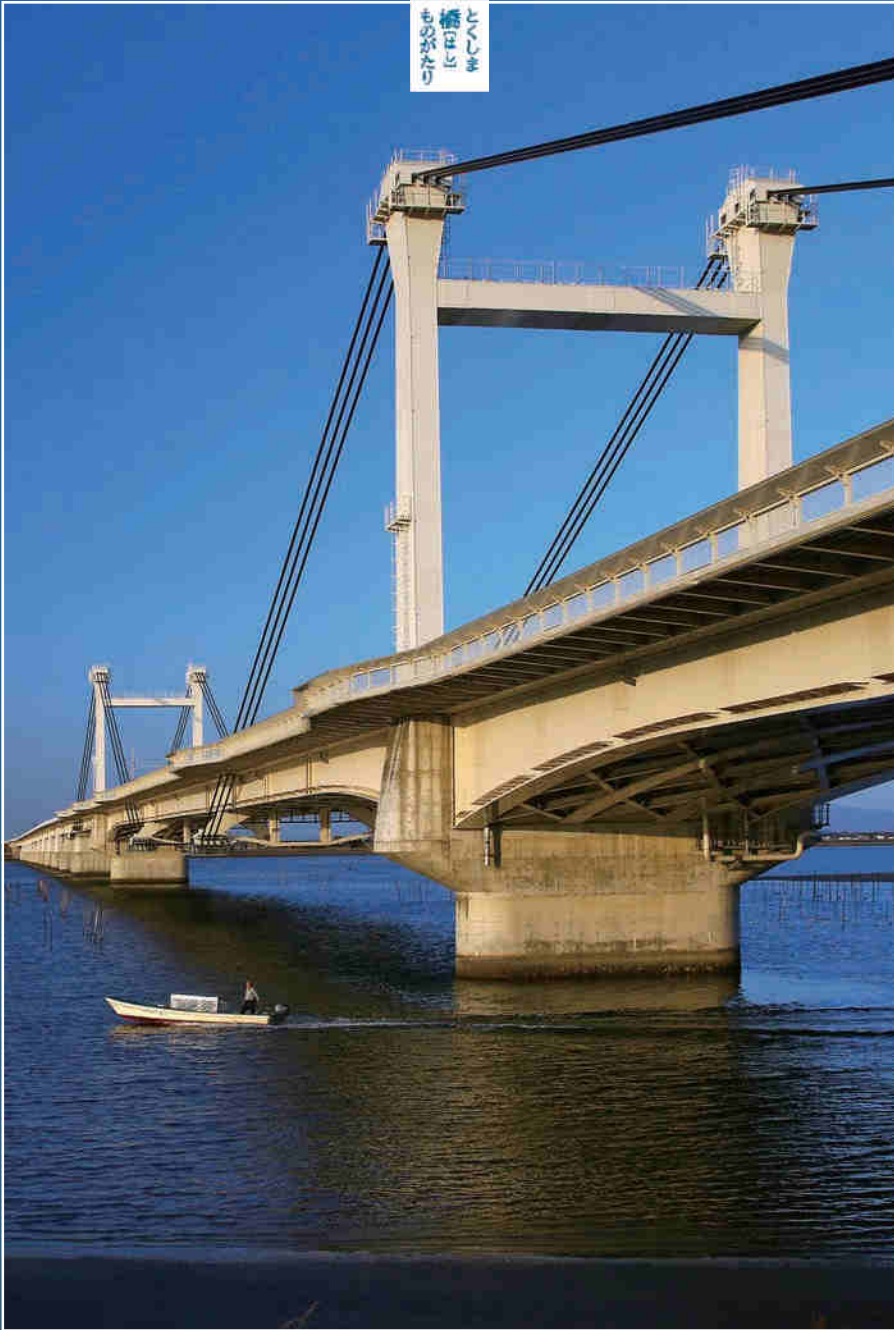
吉野川に橋が架けられることで、新たなモノの流れや人の行き来が生まれ、本県の経済活動は大きく拡大して参りました。まさに、橋は徳島発展の礎であります。普段私たちが何げなく通行する橋の一つひとつに、人々の架橋への熱い想いと、多くの物語があります。本年、吉野川初めての近代的な橋「三好橋」が完成した昭和2年から数えて、90年の節目を迎えています。この記念すべき年に、人々の想いや架橋の歴史、橋と地域や文化との関わりをまとめた橋梁史が発刊されることは、大変意義深く、橋梁史を編さんされた「徳島の橋を語る会」、「同会専門調査部会」の会員の皆様をはじめ、多くの貴重な資料をご提供された県民や関係機関の皆様にも、深く敬意と感謝の意を表する次第であります。

この「とくしま橋ものがたり」を通じ、多くの皆様が、徳島の橋の素晴らしさを知り、実際に現地を訪れ、吉野川と橋の歴史、徳島の原風景に、触れられるきっかけとなることを大いに期待しています。

そして、次代を担う若者たちが、橋と架橋技術、それを成し遂げた技術者に魅力を感じ、先輩に続けとばかりに、技術者の道を志されるとともに、こうした若者たちによって、徳島の素晴らしい橋と橋梁技術が、しっかりと後世に引き継がれていくことを願っています。

平成29年4月

とくしま
橋はと
ものがたり



「阿波しらさぎ大橋」撮影：宮武健仁（公益社団法人 日本写真家協会 会員）

徳島は水の都とも呼ばれ、一級河川吉野川や那賀川をはじめ大小約500の河川が流れている。

その河川には全国有数の橋梁が数多く架けられている。特に吉野川には、昭和初期に架橋された「三好橋」や「吉野川橋」から、平成24年(2012)に完成した「阿波しらすぎ大橋」まで、約90年の間に徳島県内に46もの橋梁が架けられてきた。(P.10・図1)

昭和2年(1927)に完成した三好橋は架橋当時、東洋一の支間長の吊橋、同3年(1928)の吉野川橋と穴吹橋はそれぞれ東洋一の長さどわが国初となる橋梁形式を誇るなど、全国的にも希に見る長大橋として広く知れ渡った。

その後、第二次大戦などの影響で架橋は一時休止していたが、戦後の昭和30年(1955)前後から「阿波中央橋」をはじめとした抜水橋や、抜水橋と比べて経済性に優れたコンクリート製潜水橋の「高瀬橋」や「脇町橋」、「川島橋」などが架けられた。

昭和38年(1963)には日本で最長、そしてわが国のPC橋のモデルとなる「名田橋」が架橋され、その後も「瀬詰大橋」や「東三好橋」、「六条大橋」など、平成に入るまでに13橋が架橋される。

平成に入ると架橋技術も進歩し、錆に強い耐候性鋼材を使った「国見山橋」、平成5年(1993)の「岩津橋」や同10年(1998)の「四国三郎橋」といった斜張橋が架橋された。

その後も平成12年(2000)、池田ダム湖に「ランガー形式」のPCバランスドアーチ橋として、橋脚と橋脚の間の長さが世界一の「池田へそつ湖大橋」、さらに同24年(2012)には世界初の「ケーブル・イグレット形式」を採用した「阿波しらすぎ大橋」が、吉野川に架かる46番目の橋として最下流に架橋されている。

現在、47番目の橋として橋長1,696.5m、高速道路が河川を渡る橋としては、北海道の長流川橋に次ぎ、国内で二番目に長い橋梁が建設中である。

河川以外でも、小鳴門海峡に架けられた本格的な海峡吊橋で、後の本四架橋時代への第一歩となる「小鳴門橋」、鳴門の渦潮を眼下に見下ろす「大鳴門橋」が架かる。

県内には、それぞれ当時の最新技術を駆使した多種多様な形式の橋梁があり、まさに「橋の博物館」となっている。

特に、吉野川の河口に架かる「阿波しらすぎ大橋」は、橋梁技術の英知を結集した世界初の橋梁形式を採用している。その高い技術力と環境への配慮が評価され、橋梁技術者にとつて最も栄誉のある土木学会の「田中賞」をはじめ、国内外の多くの賞を受賞した。(写真1)

これらの受賞を記念し、徳島県は平成25年(2013)8月に橋梁シンポジウムを開催。同シンポジウムでは、「吉野川に架かる橋の歴史」および「橋梁技術」を全国に発信し、専門家からも高い評価を受けている。

これを契機として徳島県内に架かる歴史的、技術的に特徴のある橋梁を取り上げ、

抜水橋

河川の洪水時に橋桁が水中に沈まない高さにつくられた橋で、車や人の通行時に安心して渡れるように照明灯や防護柵が設置されている。

潜水橋

河川の洪水によって橋脚や橋桁が水中に沈むようにつくられた橋で、川の流れにできる限り抵抗しないよう照明灯や防護柵が設置されていない。「沈下橋(ちんかぼ)」、「潜り橋(もぐりば)」などとも呼ばれる。



吉野川に架かる橋フォトコンテスト／一般の部 最優秀賞「橋のコラボ」(四国三郎橋)



写真-1 「田中賞」をはじめ、国内外の多くの賞を受賞している阿波しらさぎ大橋

架橋地域の歴史・文化、橋梁はしりょうの文献資料や設計・施工時の記録などをとりまとめた「とくしま橋ものがたり」を編さんする。本書が、「徳島県の宝」である橋梁をさらに多くの人に知っていただくとともに、後世に語り継いでいくための一助になれば幸いである。

はじめに 2

吉野川について 12

徳島県の吉野川に架かる橋について 31

吉野川橋梁史 詳細版 6橋梁 53
〜

③ 吉野川橋 「徳島」を象徴する橋 55

④ 吉野川橋りょう(高德線) 「四国」を誇る長大鉄道橋 75

⑥ 名田橋 日本の橋梁技術の「発展」に貢献した橋 93

⑩ 阿波中央橋 13のトラスが連なる「壮大」な橋 111

⑳ 穴吹橋 2本の塔を持った美しい「朱色」の橋 131

⑳ 三好橋 四国の経済・文化を結んだ「架け橋」 145

【コラム】架橋の夢が叶わなかった橋 —美濃田橋(美濃田観光橋)と池田橋— 161

吉野川橋梁史 概要版 40橋梁 163
〜

① 阿波しらさぎ大橋 165

② 吉野川大橋 166

⑤ 四国三郎橋 167

⑦ 六条大橋 168

⑧ 高瀬橋 169

⑨ 西条大橋 170

⑪、⑬、⑯ 善入寺島の潜水橋(⑪大野島橋、⑬川島橋、⑯千田橋、⑭学島橋、⑮学北橋、⑯香美橋) 171

⑰ 阿波麻植大橋 172

⑱ 瀬詰大橋 173

⑲ 岩津橋 174

⑳ ふれあい橋 175

㉒ 脇町橋 176

※○数字は吉野川河口から上流に向けて
それぞれの橋に番号を付したものを。

②3 小島橋	177
②4 美馬中央橋	178
②5 美馬橋	179
②6 青石橋	180
②7 東三好橋	181
②8 角の浦大橋	182
②9 三三大橋	183
③0 美濃田大橋	184
③1 吉野川橋(徳島自動車道)	185
③2 吉野川橋りょう(土讃線)	186
③3 三好大橋	187
③4 四国中央橋	188
③5 敷之上橋	189
③6 池田へそ湖大橋(徳島自動車道)	190
③7 池田大橋	191
③9 第1吉野川橋りょう(土讃線)	192
④0 大川橋	193
④1 祖谷口橋	194
④2 国見山橋	195
④3 国政橋	196
④4 赤川橋	197
④5 第2吉野川橋りょう(土讃線)	198
④6 大歩危橋	199

橋梁史の編さんを終えて 200

おわりに 202

資料編 204

引用文献・参考文献・引用図・写真 208

脚注索引 219

徳島県の吉野川に架かる橋

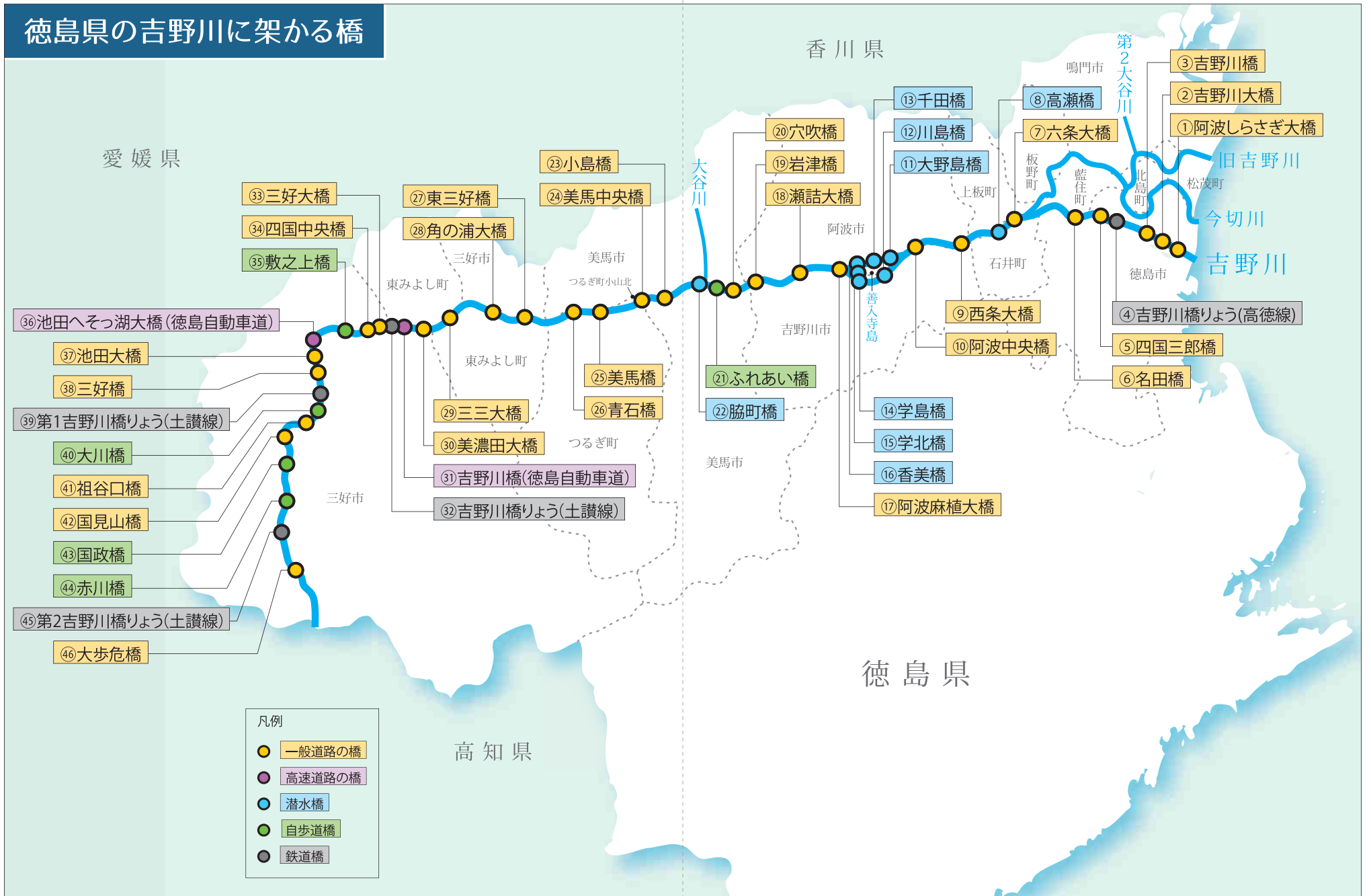


図-1 徳島県の吉野川に架かる橋(平成29年4月現在)